



# 雪男をさがす

谷口正彦

文藝春秋

谷口正彦 (たにくち まさひこ)

昭和13年12月25日、八幡市に生れる。

都立豊多摩高校をへて、38年3月、中央大学  
商学部を卒業。

38年4月、日本テレビ放送網株式会社に入社、  
運動部に勤務。45年11月、雪男探検のため同  
社を退社した。

## 雪男をさがす

---

昭和46年12月10日 第1刷

定価 650円

著者 谷口正彦

発行者 榎原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 郵便番号 102  
電話・東京 (03) 265-1211 (大代表)

© 1971 Masahiko Taniguchi

印刷 凸版印刷  
製本 矢嶋製本

---

Printed in Japan

万一落丁扱丁の際にはお取替いたします

0026-332090-7384

雪男をさがす／目次

第一章 シェルパ族の里へ……………

大ヒマラヤとの対面…………… 8

エベレストの麓…………… 24

第二章 好きだから辞めた会社……………

雪男からの「招待状」…………… 38  
ミニ探検隊の成立…………… 4

退職金、二倍下さい…………… 54

第三章 搜索開始…………… 65

シェルパ族の正月…………… 66  
イムジャ・コーラを登る…………… 74

二種類いる雪男…………… 79  
目撃者に会う…………… 85

雪男の頭皮…………… 96

第四章 「雪男」が知られるまで…………… 103

雪男と文明人の出会い…………… 104  
ブラックジャーマニズム…………… 113

私の推測…………… 116

## 第五章 最初の発見

シェルバ族の生活	122	ガジョウへの出勤	130
足跡の主は誰か	141	ボリスがやってきた	149
徹夜の待機作戦	155		

## 第六章 ボリス事件

ホームシック	162	義兄弟にあげた時計	169
ボリスとの対決	172	教科書にある雪男	183

## 第七章 雪のゴジュンバ氷河

ゴキョウの雪	188	必死の脱出	199
パパとの別れ	209	雪降りつづく	211
二度目の発見	218		

## 第八章 ヒマラヤにひびく歌

女房来る!	232	アンナプルナへ	235
-------	-----	---------	-----



隊長 谷口正彦



隊員 佐藤一義



隊員 広瀬燐雄



隊員 因幡元光



隊員 尾崎啓一

あとがき

扉カット||チベット発行の雪男の切手

写真撮影||谷口正彦・尾崎啓一

同じ場所の足跡……………	241	ソロクンプからの報告……………	256
童謡作戦……………	261	旅のおわり……………	274
私にとっての雪男……………	277		

雪男をさがす



地図作成 高野橋 康

第一章  
シエルパ族の里へ



石造りの家がならぶナムチェバザールの部落。手前の動物はヤク。

## 大ヒマラヤとの対面

ついに来てしまったか——。

カトマンズ空港に降りたとき、私には未知のものへの新鮮な期待は湧かなかつた。だからといって、これから先に待ち受けているであろう障害に対する不安もなかつた。自分がいまネパールへ来たということを確認するだけで精一杯だつた。日本を出発するまで退職するまで退職する会社の仕事を整理したり、雪男探検の準備に忙殺される毎日が続き、いまはただただ身体を休めたかつた。

カトマンズへ向かう飛行機の窓ごしに展開したヒマラヤの大バノラマに酔った興奮の余韻を、仲間の三人は、空港まで持ち込んでいた。そんな三人をうらやましいとは思つたが、私はそのときそれらの山を見なかつた。見る気持になれなかつたのだ。

登山をこころざす者が初めて八〇〇〇メートル峰に対面するとき、それらの山は、飛行機の上から見下す存在ではないと私は思う。八〇〇〇メートルの巨峰は登山家にとって神であり、教師であり、そして偉大なる敵なのだ。大地に足をつけて仰ぎ見たい。少くともかつて登山をこころざしたことのある私は、ほんやりする頭でそう考えたのだつた。

「ナマステ（こんにちは）」

両手を胸の前で合せ、円筒形のネパール帽をかぶつた先発隊員の佐藤一義と、われわれの応援団長としてカトマンズまで見送りに来てくれた高田孝先輩に、私達四人は出迎えられた。

「万事OKだ。順調にやっているよ」

一義はいつものように、にこりともせず冷静にいった。

彼が今度の雪男探検計画に参加してきたとき、私はこの計画は成功すると直感した。一義とは都立豊多摩高校山岳部以来の友人だ。一九六〇年に私がニュージールランドの山へ行ったときにも、彼は日本での準備を手伝ってくれた。まだ外貨の持ち出しがきびしく統制されていたあの時代の海外渡航は、準備段階が勝負であった。そのとき東京外語大で英語を学んでいた彼は、自分が行くわけでもないのに、ニュージールランド山岳会やユースホステル協会との手紙連絡、ニュージールランド大使館との折衝などを一手に引き受けてくれた。

そして十一年後のいま、再び一義は私のためにカトマンズを走りまわっていたのだ。ふだんは沈着冷静な彼が、私の雪男探検計画を半分も聞かぬうちに、「よし、俺はやる」といって数カ月後の昨年（一九七〇年）九月に勤め先から休暇をとり、カトマンズへ自費で下調べと予備折衝にとんでいった。そして今度はまた一カ月の休暇をとって先発し、受入れ準備をやってくれたのだ。

空港でタクシーに乗り込み、高田先輩と冗談をかわしているうちに、私の気持はなごんできた。空港付近の畑は、乾燥しきった赤土がむき出しで緑は見えない。カトマンズ盆地をかこむ山々は、雑木林におおわれているのであろうか、日本の山によく似ている。そうした山の背後に純白に輝くヒマラヤがあるのかと思うと、昔の情熱がふつつつと身体に甦ってくるようだった。まだ鬼ぬヒマラヤに、私は恋いこがれ始めていた。

タクシーは五分ほどでカトマンズの街並へ入って行った。見栄えのしない茶色っぽい長屋が続き、土間にはわけのわからぬ物が並べてある。売り物らしい。ポロをまとった女達や、裸の子供の姿が見える。

「谷さん、来たね。とうとう来たね。カトマンズだね」

うしろにいた広瀬暎雄が、鼻をつまらせながらいった。

「谷さん、写真と同じだね。カトマンズだ、間違いないよな。確かにカトマンズだよな」

広瀬は目いっぱい涙を浮べてつぶやき続けた。

私は心の中で彼にいった。広瀬、泣け。お前がどんなにヒマラヤにあこがれていたか、俺はよく知っている。思いきり泣け。涙をからすまで泣け。つい半年前までは、お前にはヒマラヤはただの夢だったろう。お前は高校時代に親父に死なれ、すぐ家業をつがなければならなかったな。そしてどうだ。裕福だった家が間もなく傾き、お前はどんなに山に登りたくても、そう勝手に山へ行けなかった。一家を食わせていくだけで、精一杯だったろう。それでもお前は山をあきらめきれず、家業を精算してから、山の映画を作りたいばかりに映画の道へ入った。長い助手時代は、苦しく、貧乏にあえいだろう。そんなお前をなぐさめたのは、山の本と写真だけだったのを、高校山岳部以来の仲間として俺はよく知っている。広瀬よ、泣け。思いきり泣け。お前は確かにいま、カトマンズにいるんだ。

私は広瀬に返事ができなかった。いま彼は、三十年間の垢を洗い落しているのだ。私は広瀬の涙

を見たとき、この旅がここで静止すればよいと思った。そして、もうこの旅がこれで終つてもいいとさえ思った。

新築だけがとりえの安ホテルの二部屋を借り、高田先輩、佐藤、私の三人が一部屋に入り、となりの部屋に広瀬、因幡元光、尾崎啓一が入った。八畳間ほどのスペースに、ベッドが三つ入り、荷物を置くと、足の踏み場もない。シャワーのあるのがせめてもの救いだ、それも時間給湯なのでタイミングよく部屋にいないと、お湯を浴びることができない。しかし標高一三〇〇メートル、冬のカトマンズは湿度が低く、直射日光はさすがに強いが、暑さを感じない快適な気候である。夜ともなれば、セーターがほしくなる。だから風呂に入れなくても、どうということはない。第一いまから四カ月間、風呂に入りたくても入れない山の中へ行くのだ。カトマンズだからといって贅沢をいってはいられない。

部屋に落ち着くと、隊員それぞれの仕事の分担をきめた。一義はピザの延長、トレッキングパーミツション（徒歩旅行許可証）の取得、税関から装備の受け出し。広瀬、尾崎、因幡の三人は食糧、鍋、食器など炊事用品の買付け。私は高田さんのお供でカトマンズ見物と休養にでもらった。

次の日からさっそく行動を開始した。皆は精を出して出発準備をしているにもかかわらず、私は高田さんと二人で、気の向くままに遊び歩いている。

一九七一年一月四日羽田発。翌五日ネパールの首都カトマンズ入り。カトマンズに着くまではす

べて私がことを運ぶから、カトマンズに着いたらあととはまかせ、という約束を日本にいるときに皆とかわしていたが、いざそうしてみると少々気がひけないこともない。だが、いま私が身体を休めておかないと、この先かえって迷惑をかけないともかぎらない。それに、この冬ハワイへ遊びに行くという高田さんを、「ハワイはいつでも行けますよ。ネパールへいっしょに行きましょう。カトマンズはいいですよ」と無理にきそった手前、高田さんがカトマンズにいる間だけは、おつきあひする義理がある。

出発態勢は着々と整っていった。シェルバは山へ入ってから雇うことにしていたが、コックは食糧品や炊事用品を購入する関係上彼の意見もあると思い、カルマ・チェリンというタマン族の男をカトマンズですぐ雇った。カルマは二十七歳の独身者。過去、アンナプルナ高峰の日本女子登攀クラブ隊など三回、日本の登山隊にコックとして雇われた経験があるので、日本人の気質や嗜好をこころえている。そのうえ彼は無類の仕事熱心で、カトマンズに不案内な隊員をリードして、ときどき仕事をかたづけにいった。カルマは買いこんだ荷物を人力車に山と積んで、ホテルに運び込む。ただでさえ狭い部屋は、装備と食糧で身動きできぬほどの盛況ぶりである。特に私達貧乏部隊は、日本から一切食糧品を持ってこなかったのだ、カトマンズで購入したサラダオイルや砂糖、塩などの調味料、罐詰類、トイレットペーパーなどの雑品が整理されなのまま部屋を占領することになった。

そんなある日、高田さんが腹をかかえて笑いながらホテルの部屋に帰って来た。

「谷口、俺、いっしょに行きたいよ。これから先どうなっちゃうのかね。漫才だね」

買物につきあった高田さんによれば、広瀬とカルマでは会話にならないらしい。

外国へ行ってしまえば言葉はどうにでもなるというのは、嘘であろう。

ネパールでは高級役人や商人たちは英語をしゃべれるが、普通の人達はまず英語をしゃべれないと思っがいい。登山隊に雇われるシェルバも、ごく一部の者しか英語を理解しない。満足に会話ができないと事はスムーズに運ばないし、その国を見るうえで楽しさが半減してしまうだろう。もちろん、何か国語かしゃべれたら、それにこしたことはないが、行く国の言葉を片言でも話せるようにしておくことは、旅行者の心得ではなからうか。

私達のパーティは、一義が旅行代理店につとめ二十数回の渡航経験がある英語のベテランであり、尾崎君は場なれた英会話で全然不自由ない。私もブローケン・イングリッシュであるがまあ大丈夫。広瀬と因幡チャンは、はっきりいって駄目である。

コックに雇ったカルマも片言の英語しか解らない。買い集めた荷物を前にして、

広瀬「これだけの荷物でポーターは何人だ」

カルマ「十五ルビーで交換したら損ですよ」

広瀬「十五人？ もっといるだろう」

カルマ「だから、十五ルビーでは損ですから、サーブやめなさい」

広瀬「駄目といったってしょうがないよ。少くとも二十五人はいるな」



カルマ「二十五、とんでもない。二十五ルピーじゃ高すぎます」

広瀬「ところで、この罐には粉末醤油を入れたらいいね、カルマ」

カルマ「この罐、ガソリンの臭いはもれないから、大丈夫です」

こんな調子で、そばで聞いていると何がどうなっているのか、さっぱり解らない。それでも、必要品は大方カトマンズで仕入れることができた。日本からわざわざ運賃をかけて持参する必要はない。たいていのものはカトマンズでそろうし、しかも安価だ。

ただ一つ困ったのは石油である。この時期、インドとネパール間で経済的なトラブルがあり、インドがネパールへの石油の輸出をストップしてしまった。新聞は毎日「ほしがりません、勝つまでは」式の記事をデカデカと載せ、インド大使館へのデモが連日続いていた。石油販売が制限され、バザール(市場)では小さな罐を持った市民達が、長蛇の列を作っていた。そのため、私達は仕方なく高い開石油を買わされるはめになった。

一月八日、朝四時起床。高田さん、一義、因幡チャン、私の四人で、カトマンズの東、自動車で二時間ほどの所にあるデュウリッヘルの丘へヒマラヤの夜明けを見に行く。籠に野菜を満載したポーターが、夜道をカトマンズの市場めぐりして黙々と歩いている。天秤棒で担がれた野菜がヘッドライトに照らし出される。キャベツ、芥子菜、大根、ニンジン……。幾人も幾人もものポーターが、裸足で歩き続けている。

途中で車を降り、夜道を三十分ほど登って、デュウリッヘルの丘に着いた。カトマンズの郊外は